

伊藤孝博
Ito Takahiro

北海道 の 人 国 記

江戸から明治にかけ、
本州から北海道へ
交易や廻船業、
船舶、造船、海運、
港湾、海防、漁業、
水産加工などの
「海の仕事」に
関わった
先駆者たちの
足跡を追った
人物歴史探訪！



無明舎出版
定価 2940円 (本体2800円+税)

やまだぶんえもん

第19景

山田文右衛門清富

(第十代目・山田文右衛門)

——本格的な昆布養殖の創始者。

幕末の蝦夷島で「海」の分野に幅広い足跡——

〈石川県出身〉

幕末の蝦夷島各地で、「海」の分野に広範な足跡を残した場所請負人。同時代の商人たちの中でも、その活動ぶりが最も際立っていた人物の一人といえるかも知れない。本格的な昆布養殖の創始者としても高く評価されている。

山田家(※)の祖先は能登国の神代村(かぐみ)(石川県羽咋郡志賀町)で船主船頭をしていたといわれ、天明年間(1781)のころ、七代目・山田文右衛門の代に福山に渡つたらしい。七代目は同村の又一の次男として生まれ、能登国阿部屋村の間屋である阿部屋(村山)甚右衛門が親元(身元引受人のようなもの)になっている。姓を持たない一漁民の子だったのが、才能を認められて山田家の養子に迎えられる、阿部屋の後ろ盾を得て福山(松前)に渡つたとも考えられるようだ。

七代目・文右衛門は天明七年(1787)、栖原屋角兵衛(六代目)が請け負っていた留萌場所の支配人となった。船主船頭の山田家が箱館地方と越前方面を結ぶ昆布輸送に従事し、これが縁で栖原屋との関わりができていたのではないかともいう。寛政三年(1791)時点の留萌場所支配人は、

八代目・文右衛門だった。山田家は六代目までは女子しか生まれず、娘婿を養子として家を継いでいたが、七代目で初めて男子が生まれ、以後は実子が相続するようになる。

八代目・山田文右衛門（有智。隠居後は喜右衛門を名乗る）は蠣崎氏かきざき一門から妻を娶りめと、七代目の後を受けて留萌場所と勇払場所の栖原の支配人を務めた。第一次幕府直轄化に伴い一旦廃止された場所請負制が復活した文政四年（1821）には、勇払場所の請負人となった。栖原屋が「証人」になっており、栖原角兵衛が引き立てたと考えられている。

余談だが蠣崎氏といえば、十五世紀に田名部（下北）に現われ蠣崎氏に身を寄せた武田信広（第1景。後に蠣崎氏を継いで松前氏の祖となる人物）は、昆布の取引を通じて蠣崎氏との付き合いがあったともいう。武田信広の出自を「若狭の商人」とする説がある所以だろうか。

※山田家の系図は幾通りかあつて、清富を16代目とする説もある。しかし最も信頼できると思われる『蝦夷地場所請負人 山田文右衛門家の活躍とその歴史的背景』（ロバート・G・フラッシュェム、ヨシコ・N・フラッシュェム夫妻共著）や『わが祖 山田文右衛門履歴』（亀畑義彦氏）は清富を第10代目としており、本書もこれによる。

場所請負人・山田文右衛門の基礎を築いた八代目

勇払場所を栖原から受け継いで独立した八代目・文右衛門は、翌年の文政五年（1822）に沙流場所、天保三年（1832）に厚岸場所を請け負った。これに先立つ文化四年（1807）、留萌場所支配人当時の八代目・文右衛門は、道路開削にも尽力している。留萌地方の海沿いの交通ルートは

極めて危険だった上、同地方と太平洋側の勇払方面を結ぶ内陸ルートも未整備だった。文右衛門はアイヌの人々を雇い、同地から山を越えて石狩川中流のオシラリカ（樺戸郡と雨竜郡との境）に抜ける約二十五里（約百km）の難路を拡幅整備。オシラリカから先は舟運を使い、石狩・千歳方面に行き来できた。

また勇払場所に属していた千歳で多くの牛馬を飼育し、千歳と美々間の道路を改修して荷物輸送の便をはかった。この荷物輸送の際、文右衛門は、蝦夷地で初めて車を用いたという。もちろん、荷車だろう。

八代目・文右衛門は、請け負った太平洋側の各場所からアイヌの人々を石狩・小樽・根室などに出稼ぎに送り込み、新漁場を開いている。彼は江戸深川に隠居所を設け、喜右衛門を名乗った。この間、息子の喜長が九代目・文右衛門を継いだが、江戸に住んで一度も蝦夷地を見ることなく、四十四歳で没した。九代目の時の山田家の事跡の多くは事実上、隠居の喜右衛門と、九代目の請負場所をまかされた山田寿兵衛（徳孝）のものだったようだ。山田寿兵衛は箱館を拠点に活躍し、後に豪商となる人物で、十代目・山田文右衛門清富の実弟である。

八代目・山田文右衛門（喜右衛門）は文政十一年（1828）に厚岸場所も請け負い（※）、文政十三年（1830）、箱館で病没。六十六歳だった。

※厚岸場所請負は天保三年（1832）との資料もあり、定かでない。

十代目・山田文右衛門の足跡

八代目・山田文右衛門の弟に、山田仁右衛門と山田市郎右衛門房寛らがいた。ともに八代目の事業を助けたが、九代目の長男が十一歳で没すると、市郎右衛門の次男の清富が九代目の養子として本家の家督を継いだ。これが十代目・山田文右衛門である。生まれは文化十四年（1817）。ちなみに市郎右衛門の三男・徳孝（後の山田寿兵衛）は、九代目の子の養子の形で箱館の店を継いでいる。

十代目・山田文右衛門（以下、ただ文右衛門と略記）も積極的な漁業経営に努めて同家の全盛期を築いたが、紙面の関係で幾つかの事跡に絞ろう。



十代目・山田文右衛門の肖像（厚岸町海事記念館蔵）

安政二年（1855）に蝦夷地が幕府再直轄になると、文右衛門は安政三年、千歳に米三百俵をストックし、開拓推進のための非常用備蓄米とした。幕府はこれを賞して、文右衛門に苗字帯刀を許した。八代目・文右衛門も松前藩主から苗字帯刀とその世襲を許されており、幕府によって改めて認められたことになる。安政四年（1857）、幕府は松川辨之助（前述）を差配人として樺太漁場の開発に遣わした（後、差配人元締め）。山田

文右衛門も願い出て差配人並に任じられ、安政五年（1858）、船や資材、人員を送り込み、樺太東海岸に漁舎、倉庫などを建てて数カ所の漁場（鯨・鮭・鱒）を開拓した。自費である。

樺太漁場の経営費用は巨額にのぼり、松川辨之助や他の商人たちはこれに耐え切れずに文久元年（1861）、差配罷免を願い出る。文久三年（1863）、幕府はこれを許し、樺太経営を伊達林右衛門と栖原半七の二人に命じた。唯一人踏ん張っていた文右衛門にとっては不本意な交代劇だったろうが、元治元年（1864）の漁をきちんと成し終え、膨大な資本を投じて築き上げた漁場を伊達と栖原に引き継いだ。「名を求めず」と後に評されたという文右衛門の、人柄を窺わせるエピソードだろう。

文右衛門はまた、ぜにばこ銭函（現・小樽市内）から今の札幌を経て千歳に至る道路開削にも加わっている。安政四年（1857）に箱館奉行の依頼で引き受けたもので、松浦武四郎らがルート調査した後、小樽内場所請負人の恵美須屋（岡田）半兵衛、石狩場所請負人の阿部屋（村山）伝次郎と持ち場を分担。文右衛門は勇払場所請負人として、島松く千歳間を完成させた。

先に八代目・文右衛門が千歳く美々の間を開削し、美々から勇払までは舟運だったが、十代目・文右衛門はこの間の陸路も開いている。

昆布養殖事業の祖・山田文右衛門の「投石法」

昆布養殖を試みたのは、文右衛門が最初というわけではない。古くは元禄元年（1688）、水戸

光圀の「快風丸」が蝦夷島から水戸に持ち帰って移植しようとしたといわれ（これは失敗）、享保年間（1716）には津軽・外が浜の貞伝上人（今別本覚寺）が蝦夷島の昆布を外が浜に移入し、後の今別昆布や三厩昆布のもとになったとも伝えられる。

天保年間（1830～1843）には、寿都場所を請負っていた近江商人・田付新兵衛が、昆布の着いた石を運んで沿岸に移植したとされ、その後も幾つかの事例が知られている。しかし事業としての本格的な養殖に挑み、大きな成果を上げたという点では、山田文右衛門清富こそ創始者だったのである。

請負場所の一つである沙流の沿岸は、漁場としては豊かだったが、昆布がほとんど育たなかった。思案をめぐらせた文右衛門は万延元年（1860）、近くの山から百個ほどの石を切り出し（数百個とも）、一個ごとにシュロ縄で縛り、所々に目印の浮き木を付けて、様々な水深のところに沈めてみた。半年後に引き上げて確かめると、案の定、昆布が付着し始めていた。十二カ月経つと、昆布は根付き、増えていた。

文久二年（1862）六月、巡視中を通りかかった沙流のホロナイ海岸で、捨てられていた陶器片に昆布が生えているのを見た。馬から下りてじっくりと眺めた文右衛門は、「昆布というものは天然の岩礁にだけ生えるわけではない」ことを知ったという。

もつとも、すでに石を沈めて一定の効果が分かっていたとすれば、やや時間の前後関係が不自然な気もする。陶器片の昆布を見て閃き、石を沈めて試して見た、というのが自然な順序ではあるまいか。それとも、石で試しては見たが、陶器片を見て一層確信が持てたということだろうか。

いずれにせよ文右衛門は、文久三年（1863）から、本格的な実用化研究に取り組んだ。箱館の石工十二人を呼び寄せ、石工一人に地元で雇ったアイヌの人々三人ずつを配置してチーム編成（計三十六人）。通訳も手配し、沙流太川河口付近（佐留太。現・門別町富川地区）の山から大量の岩石を切り出した。

石は長さ一尺五寸から二尺、幅一尺から一尺三〇四寸。石積船五隻を新造し、西は勇払との境から東は新冠との境にかけて、網引場を除く沙流沖五百〇六〇mの水深五尋^{ひろ}〇六尋（二尋は約一・八m）までの海中に、二万七千個も投げ入れたというから驚く。すべて私費である。翌年の元治元年（1864）、アイヌの素潜り名人に調べさせると、折角投げ入れた石の多くが砂泥に埋もれてしまっていたが、たまたま埋まっていなかった石には質の良い昆布が育っていた。

そこで今度は石が埋没しないよう投入ポイントを限定。慶応二年（1866）までの三年間、毎年五万個を投入した。石が埋没した所には、数隻の石積船で集中的に沈めた。これらの取り組みには、文右衛門の娘婿である四代目・山田仁右衛門（後の榊富右衛門）も差配人として加わっている。

事業化の目途がついた慶応二年、山田文右衛門は、昆布養殖部門を三男の山田文治（後に文右衛門家の十一代目を継ぎ山田清次となる）に委ね、請負場所の沙流・勇払・千歳と出稼場所の厚田（石狩）・高島（小樽）の漁業経営を榊富右衛門に任せて隠退した。榊は、昆布養殖も含めて全体を統括したようである。

幕府箱館奉行は慶応二年（1866）、東西蝦夷地の場所請負人たちに対し、山田文右衛門の投石法をモデルとして昆布養殖に取り組むよう奨励した。山田文治は石積船を七隻に増やし、慶応三年

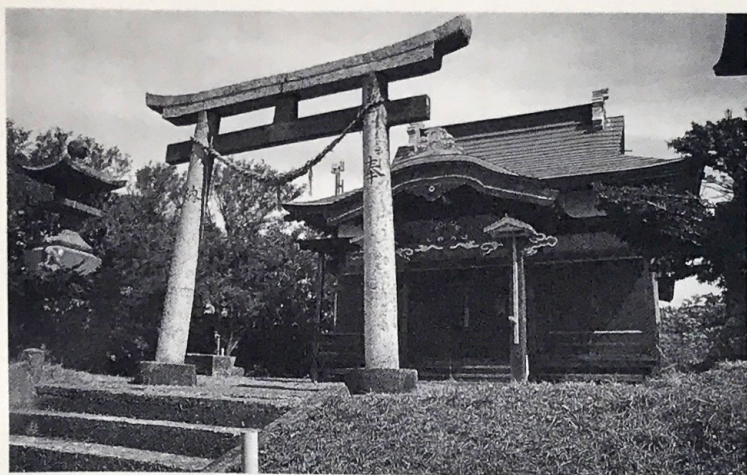
(1867)と慶応四年(明治元年に改元)にそれぞれ七万個の石を投入。文右衛門が着手して以来投じられた石の総数は、七十七万個に及んだとも伝えられる。従来、この地方で採れる昆布は年産五十石程度にすぎなかったのが、慶応元年には二百石、同二年には三百八十石、同三年には五百六十石。翌年の明治元年(1868)には七百石と十四倍にも増えた。投石法による養殖の効果は、誰の目にも歴然だったといえよう(製品の乾昆布一石は七十五kg)。

こうして山田文右衛門が確立した「投石」による昆布養殖の原理は、基本的には今も広く継承されており、昆布業界史上高く評価されている。明治十四年(1881)、明治天皇函館巡幸の際、文右衛門はこの昆布養殖の功績を称える賞状を受けた。明治二年(1869)に場所請負制度が廃止された後も、十代目・山田文右衛門は山田家最初の請負場所である勇払にとどまり、明治十六年(1883)、勇払郡勇払村で六十四歳の生涯を終えた。息子・文治の膝を枕にした最期だったという。

〈各所に残る山田文右衛門ゆかりの地〉

【門別稻荷神社】(門別町) もとは近藤重蔵が義経像を祀らせた義経祠だったとされる。最初の義経祠はシノタイ岬付近にあったとも伝えられるが、享和二年(1802)、比企可満ひきよみつが沙流会所付近に移設。これが後の門別稻荷神社である。

慶応三年(1867)、十代目・山田文右衛門は、老朽化した祠に代わる新たな社殿を造営した。慶応四年正月に完成。持船で本州から宮大工を運び、鳥居などの石は銚子の御影石を使ったという。文右衛門は当時すでに隠退していたはずだが、鳥居に刻まれた願主の名は、沙流場所請負人として、息子・文治と連名になっている。請負人代として、山田富右衛門(榊富右衛門のこと)の名が刻まれ



十代目・山田文右衛門が造営した紋別稲荷神社。門別町は開発百年記念として、神社境内に山田文右衛門顕彰碑を建立した

ている。鳥居の左柱には、世話人として、加州橋立浦西山の広徳丸の船主・長蔵や船頭らの名があり、加賀・橋立村との関係の深さを物語っている。

同神社には、山田文右衛門清富や山田寿兵衛が寄進した絵馬や太鼓、文右衛門自筆の献額などが伝わり、境内には昭和四十七年、門別町開発百年記念として、門別町、門別町漁協、門別町農協、ほか関係者により、山田文右衛門顕彰碑が建立された。碑の下には、文右衛門の事跡を永く伝えようとタイムカプセルが埋められている。

なお門別町には、八代目・文右衛門有智の下で沙流場所支配人をつとめた初代・山田仁右衛門（有智の三男）の墓もある。安政三年に当地で病没。勇払場所支配人だった二代目・仁右衛門（初代の子）が建立したものである。

【勇払竜神社】（現・恵比須神社。苫小牧市）文政年間（1821～1830）に山田文右衛門が水神・八大竜王を祀って建立。勇払の鎮守社になったという。その後、現在地に移転し、名も蛭子神社、恵比須神社と変わった。時期が正しいとすれば、創建したのは八代目・文右衛門だろうか。

同神社には、十代目・山田文右衛門が文久四年（1864）



勇弘（苫小牧市）の恵比須神社には、この手水鉢をはじめ山田文右衛門が寄進した多くの奉納品が残っている

に寄進した石灯籠と、方位入りの石造手水鉢、山田文治が寄進した六角吊灯籠などがある。その前年に麻疹が流行し、勇弘場所の山田家の番人たちも犠牲になったことと関係するとも考えられるという。山田家は勇弘の本格的開発と切り離せない存在だったから、勇弘会所の役人や八王子千人同心とも深く関わっていた。その意味で、勇弘史跡公園もゆかりの地の一つである。公園には、勇弘場所の山

田の関係者たちの墓も移設されている。勇弘場所には、シコツ（千歳）場所が含まれた時代もあった。千歳場所については後述する。

【国泰寺と蠣島弁天社】（厚岸町） 山田文右衛門の請負地の一つ厚岸場所は、東蝦夷地一の湊といわれた天然の良港を中心に、今の厚岸より遥かに広い範囲を含んでいた。請負人として当然、厚岸の国泰寺（蝦夷三官寺）とも関わりが深く、天保十三年（1842）建立の仏舎利塔は、山田文右衛門が藤野喜兵衛らとともに寄進したものである。塔石は文右衛門の持船の一つ順悦丸で運んだ。境内にはほかにも文右衛門ゆかりの桜や石仏があり、敷地の一角の旧・神明宮跡地（竜王殿）にも天保八年（1837）に文右衛門が寄進した石灯籠が残る。

厚岸の蠣島弁天社は天明年間（1781）以前に創建され

たらしいが、嘉永四年（1851）に祠も弁天像も焼失した。再建後に像を納めた靈祠の扉には、嘉永五年に山田文右衛門と山田寿兵衛が奉納した旨が記され、像は国泰寺仏牙舍利塔の塔石などともに文右衛門の船で運ばれてきたと伝えられているという。なお浜中町（釧路管内）の曹溪寺にある竜王殿前にも、方位入り手水鉢が残っている。山田文右衛門の持船の一つ豊福丸の船頭が寄進したものだ。

石狩場所と山田文右衛門の墓

近江商人や江戸系商人と違い、山田家は本家も有力な分家も、蝦夷島に腰を据えた「地付きの」勢力となった。このため、多くの関係者の墓が、北海道にある。勇払で没した十代目・山田文右衛門清富と妻の墓は、石狩市の能量寺にあり、十一代・山田清次（文治）もここに眠っているという。

石狩場所は阿部屋（村山伝兵衛家）との関係が深かったが、たびたびの疫病や鯉の大不漁などによるアイヌ人口の激減、その他さまざまな理由が重なって行き詰まり、文政三年（1820）から栖原屋が引き受けた。

山田家が石狩場所に関わるようになったのは、山田市郎右衛門（八代目・文右衛門の弟。十代目・文右衛門の実父）の時、栖原が行っていた秋味（鯉）船積の支配人を務めたといわれる。

安政二年（1855）に蝦夷地を再直轄化した幕府は、安政五年（1858）、石狩場所の請負制度を廃止し、出稼方式に切り替えた。当時の石狩場所請負人は村山家の分家である阿部屋・村山伝次

郎だった。

十代目・山田文右衛門は石狩場所への出稼ぎに進出。聚富地区での大網を中心として、各漁場での鮭漁の開拓経営に乗り出す。阿部屋と交替で網を引いたり、二対一の割合で引いたり、相互に漁獲物を所定の割合で納め合うなど、一種の入会方式いりあひだったといわれる。請負人でなくなったとはいえ、石狩場所に長年関わってきた村山家の力は大きかったようだ。

そうした中で文右衛門は、幕府（奉行所）役人のための人馬継立や、増加する定住者のための生活物資の仕入・販売に取り組んだ。万延元年（1860）ごろ、定住者が六十軒余にまで増え、阿部屋と山田の運上屋が一棟ずつあったというから、文右衛門の石狩での勢力はかなり阿部屋に迫っていたのかも知れない。

明治二年（1869）、明治政府（開拓使）によつて場所請負制全体が廃止されると、石狩役所の駅通業務取扱役は山田文右衛門に命じられた。幕領時代からこの業務を担っていた阿部屋・村山伝次郎が、箱館戦争の際に榎本軍に協力したと疑われたためともいう。

主な仕事は、役人や一般人の通行チェック、運送の継立、赴任した開拓使役人一家の生活必需品調達、食料その他の生活用品の非常用備蓄など。基本的には文右衛門の自腹だったといわれる。当時の石狩は漁業だけでなく樺太経営上の交通運輸の要地となり、取扱業務は莫大な赤字を伴ったと記録されている。

ともあれこうして、石狩は山田家にとって深いゆかりの地となったのだった。

なお天塩の厳島神社境内にある金毘羅宮前には、山田福松（後の山田市郎右衛門。十代目・山田文

右衛門の実父)が寄進した小さな狛犬こまいぬが残っている。文化年間(1804)から文政四年(1821)ごろのものと見られ、当時の天塩場所は請負人・栖原の下、八代目・山田文右衛門が支配人、弟の山田福松が支配人代兼通辞をしていたという。この狛犬はかなり風化・破損が進んでいるが、山田家が場所請負人として独立(勇払場所)する以前の活躍ぶりを示す、北海道唯一の現存遺物だといわれる。このほか、松前町の光善寺には、山田家一族の墓所がある。松前(福山)は、蝦夷島での山田家の歴史の出発点であり故地だった。

シコツと千歳と鮭鱒孵化場

千歳市のエリアは海はないが、鮭の豊富な千歳川があり、アイヌの人々にとって恵みの地だったといわれる。和人が入り込むようになると、鮭資源に加えて日本海側の西蝦夷地と太平洋側の東蝦夷地を結ぶ陸上交通の要衝としても着目され、シコツ場所が開かれた。広く見れば、シコツ場所は勇払場所に属した。

幕府直轄時代の文化二年(1805)、シコツ場所を担当していた箱館奉行調役並の山田鯉兵衛は、「シコツ」の名を(川名も地名・場所名も)改めるよう箱館奉行に願い出る。どこの場所にも珍しくなかったが、不漁の際の食料不足や疫病の流行などで、死亡するアイヌの人々が多かつたらしい。鯉兵衛は、シコツが「死骨」に通じるとして改名を申し出たのである。

当時の箱館奉行・羽太正養はこれを許可し、シコツを廃して「千歳」と命名した。この地に数多く生息していた鶴の長寿にちなんだと伝えられる。文化年間に作られた釜加神社(千歳市)の弁財天厨子の背には改名由来が記され、千歳市初の指定文化財になっている。もともと「シコツ」は、広大な



松前町の光善寺には山田文衛門家の墓もある。北海道内には山田家関係の墓が少なくない

窪地・河谷を意味するアイヌ語「シ・コツ」に由来し、この地を流れる川（千歳川）や一帯の地を指したという。川の上流の湖を「シ・コツ・トー」（シ・コツの湖）と呼び、これが支笏湖だ。湖にだけ、本来の名をとどめたことになる。当然ながらシコツ地名はほかにもあり、函館の亀田なども、旧名シコツといったのを、和人が「死骨」に通じるとして亀田に変えたと伝えられる。鶴より長寿の亀にあやかっただろうか。

幕末の勇払場所請負人だった十代目・山田文右衛門も、千歳場所の経営に深く関わった。開拓使が場所請負制度を廃止した明治二年（1869）当時、文右衛門はすでに沙流場所を息子の文治に、勇払場所を娘婿の榊富右衛門に譲って隠居していたとされるが、千歳については自ら関わり続けた節もあるらしい。明治六年の記録に、「千歳会所 山田文右衛門」とあり、役邸二軒、和人出稼者の家十二軒、アイヌの家二十七軒があったことや、産物としては鮭三千石と熊、鹿が挙げられているという。

文右衛門は石狩と同様、千歳でも自腹を切つての駅遞業務を担っていたようだ。やはり膨大な赤字を強いられ、一介の漁場持となつた身に、かつて樺太開拓に踏ん張つたような場所請負人時代の勢いはなかった。新政府の重税にあえぎ、税率軽減の嘆願書を出したとも記録されている。



北海道の近代水産史に名をとどめる伊藤一隆の肖像（北大北方資料室蔵）

そんな苦境の中でも山田文右衛門は、鮭の乱獲による千歳川の資源荒廃を憂い、千歳駅（駅通の駅）上流域に鮭産卵繁殖場を設定。番人を配置して密漁監視にあたった。千歳川の鮭鱒養殖の、先駆けといえよう。

北海道庁もこの地の監視を引継ぎ、明治二十一年（1888）、北海道庁水産課長の伊藤一隆が、国費による千歳鮭鱒人工孵化場を建設した。明治二十九年（1896）には効率的な鮭鱒採捕のためインディアン水車を導入。水車は世代交替したが今も稼働し、一帯は「サケのふるさと館」を併設した公園として整備されている。

なお千歳の弁天社は万治元年（1658）創建とも文化二年（1805）建立ともいうが、天保十五年（1844）、文右衛門が新たに建造した。近くの志古津稲荷社も同年、文右衛門が新造したという。いずれも今は、跡地に碑が建っている。

なま え MEMO

伊藤 一隆
いとうかずたか

安政六年（1859）〜昭和四年（1929）。江戸に生まれ、父が

明治十九年（1886）、北海道庁誕生とともに初代の水産課長になった。同年、先進地アメリカの孵化場や水産事情を視察。明治期の北海道水産界発展に指導的役割を果たした。

榎本武揚に請われて土木工事のため渡道したことに
より、北海道の人となる（当時の榎本は箱館戦争の
「罪」を赦され開拓使の要職にあった）。明治十三年
（1880）、一隆は札幌農学校第一期卒業生十三人
の一人として開拓使に就職（十三人全員）。明治十
七年（1884）、水産団体「北水協会」を設立し、

明治二十七年（1894）に役人を退き、水産会社
や水産団体、石油事業などに関わった。本書・西川
貞二郎の項にも登場する（第33景）。札幌農学校時代
のクラークとの出会い以来、敬虔なクリスチャンでも
あった。

山田寿兵衛宅での出来事——ペリー箱館来航余話

安政元年（1854）三月に日米和親条約（神奈川条約）を結んだペリーは、翌春の開港が決まっ
た箱館を視察に訪れた。四月十五日、艦隊のうちバンダリア号など三隻が入港して沖ノ口役所前に停
泊。二十一日、ペリー提督の乗った旗艦ポーハタン号など二隻が入港。ペリーらと日本側の会見場兼
接待場となったのが、弁天町にあった山田寿兵衛の屋敷である。屋敷は十代目・山田文右衛門のもの

だったが、当時は実弟の寿兵衛に譲り、文右衛門は勇払に住んでいた。

松前藩家老や幕吏の対応の様子については前述したが（第15景）、山田家とペリーらの「民間交流」のエピソードを拾ってみよう。

山田寿兵衛家では、平碗や鉢など、様々な器に盛った心尽くしの日本料理でもてなしたらしい。しかしその多くはペリーらには苦手だったようで、箸も使えず、御飯に汁物をかけスプーンで挑戦。顔中に飯粒をつけて奮闘していたという。山田家が牛の舌に油で揚げたジャガイモを供すると、一行は大喜びしたと伝えられる。味や姿は定かでないが、牛タンのフライドポテト添えというわけだ。よく思い付いたものである。ペリーらが注文したのだろうか。

山田寿兵衛の娘エンは、当時十二歳だった。髪を高島田に結い振袖姿で給仕に出ると、ペリーは「生きている人形のようなだ」と感激。アメリカに連れて行って大事に育てたいと希望したという。子供だったエンは泣き出したというが、別の資料によると、アカンベーをして尻をペンと叩いたともいう。ペリーは帰国に先立ち（五月八日に出港）、銀の盆に色とりどりの丸ローソクと石鹼を乗せてエンにプレゼントした。エンが石鹼を菓子と間違えて食べようとする、ペリーは手を洗う仕草をして大笑いしたという。

ペリーらは寿兵衛宅で漆器など色々購入したようだ。世話になった礼に、塩漬の象肉と豚肉、パンなどを置いていった。象肉は鯨に似ていたというが、豚肉は臭くてもてあましたといわれる。

寿兵衛宅の大きさや作りの見事さについては『ペリー日本遠征記』（ペリー著）にも描かれており、後のエンの回顧でも、弁天町で最も大きな屋敷だったという。

ペリー箱館来航に際して松前藩は、町の人々に「外出して見物しないこと」「場末に住む女性や子供は山の手の知人宅などに避難すること」「海の見える家は戸障子を目張りし、決して覗かないこと」など十八カ条の心得を通達したが（趣旨）、そうは問屋が下ろさなかつたらしい。英語で十まで数えられる子供が現われたり、箱館弁を覚えたアメリカ人もいたと伝えられる。町のあちこちで、子供たちを含む箱館庶民とペリー艦隊乗組員たちの出会いがあつたようだ。

エンの長女のエイは後に、蛭子末次郎と結婚している。蛭子末次郎は諸術調所で武田斐三郎に学んだ弟子の一人で、航海術の名人といわれた。箱館丸はじめ多くの官船の船長を務め、黒田清隆の外遊や明治天皇巡幸の船も操船。その後も海運・海事などの分野で活躍している。

『我が祖 山田文右衛門履歴』によれば山田寿兵衛は、明治初年の新政府による植民地的政策に反対し、蝦夷島「共和国」独立を説く榎本武揚に資金協力。明治二年、箱館戦争の（榎本軍の）敗戦とともに没落した。それでも、函館で米問屋に転向して再起したという。

厚岸・浜中地方と榎富右衛門の事跡

山田家の一族で、文右衛門とは別個に明治初期の道東開拓史に名をとどめた人物が、榎富右衛門である。七代目・山田文右衛門の時、山田仁右衛門が独立して分家を立て、代々、文右衛門家の手代や請負場所支配人として経営に従事した。四代目の山田仁右衛門は福山から箱館弁天町に本拠を移し、明治元年（1868）、長男の富太郎に五代目・仁右衛門を襲名させて隠居。隠居後の名が榎富右衛門だ。

富右衛門は田名部の菊地家（南部藩士）に生まれ、十代目・山田文右衛門の長女と結婚。文右衛門の支配人となった。妻が若くして死んだ後、文右衛門の末娘と再婚し、文右衛門の右腕となって山田家を支えた。隠居後も本姓は山田のままで、榊は通称だったらしいという。

隠居したとはいえ、榊富右衛門は働き続ける。明治元年、厚岸、沙流、勇払場所の経営を十代目・文右衛門から引き継いだ。場所請負制度が廃止された明治二年（1869）、旧・厚岸場所は佐賀藩の分領となり、同藩は漁場の経営を漁場持の富右衛門に任せた。明治三年、佐賀藩は厚岸会所前々別寒辺牛（かんべうし）浜中の旧道に代えて、厚岸会所前々ルリラン（ルリラン）浜中の新ルートを開いたが、工事は榊富右衛門が自費で完成させたものだった。人夫六十人で六十余日だったといわれる。

同年、富右衛門はルリランのアシリコタンに家屋二十棟（一棟二戸入り。総工費三千四百円）を自費で建設。南部、津軽、秋田、函館、福山などから漁民を募って二十九戸・八十一人を入居させ、家財道具や漁具類も支給した。これによって生まれた町は榊町と名付けられ、後の浜中町の本村となったのである。アシリコタンは江戸時代に松浦武四郎が書き留めた地名で、「新しい村」の意味だという。何処からか移ってきたアイヌの人々のコタンがあつたのだろうか。

富右衛門は更に、厚岸のヌサウシに住宅十八棟（一棟二戸）を建設し、三十二戸・八十二人を移住させて新たな町を形成。移民たちは厚岸漁場で働いた。この町が、厚岸町湾月町のおこりとされる。厚岸会所付近や浜中の海岸地帯には、昆布船二十五隻分の昆布干場や海産物干場も開き、昆布漁や鯨漁で賑わうようになった。同じ明治三年、仙台藩は沙流郡サルプト（佐留太。今の門別町の中心地の一つ）に、農家二十三戸と役宅二棟を建てた。建築費四千七百五十円は富右衛門が負担し、仙台藩は

富右衛門を一代士分並・五人扶持にした。富右衛門は佐賀藩と仙台藩のほかに高知藩、黒石藩にも協力し、いずれの藩からも賞されている。

榊富右衛門は同年、漁場持として経営していた漁場のうち勇払郡や沙流郡の漁場を返上し、数年後に没したが、厚岸・浜中地方の「町のはじまり」にとつて欠かせない存在だったといえよう。

なお榊富右衛門の息子の山田富太郎（五代目・山田仁右衛門）は、慈恵医科大学を卒業して札幌市立病院の軍医となった後、浦河で開業した。貧しい人からは金を取らず、夏は馬、冬は馬ソリで、夜中でも山越えして往診したという。金が溜まると船を作り、船の無い貧しい漁民に貸与したというのが、いかにも富右衛門の息子らしい。自身は生涯、床の傾いた家に住み、子供たちには財産を残さなかったそうだ。富太郎の子供たちは、学者や医者、水産行政や実業界、報道などの分野でそれぞれ活躍した。

波間の風景

厚岸牡蠣の物語——商品化の草分けは小島利兵衛

話が「厚岸」に及んだので、同地名産の牡蠣かきについても触れておこう。

厚岸湾と厚岸湖がつながっている天然の良港・厚岸は、古くから牡蠣の産地として名高い。それを象徴するような存在が、湖に点々と形成された牡蠣島である。干潮時にしか湖面上に姿を見せないようだが、これらの島々は何と、すべて牡蠣礁（牡蠣貝の堆積で出来た岩礁）だというから驚くばかり。江戸時代どころか、遥か古代から、営々と牡蠣漁が重

ねられていたのではないだろうか。

実際、厚岸湖の北西岸一帯には、続縄文・擦文期を主体に近世から一部は近代にまで続くという、大規模な厚岸神岩砦跡（カムイワチャシコツ）・堅穴群（北海道指定史跡）が広がっている。少なくとも六千年前から人々が暮らしており、むろん江戸時代以前からアッケシ・アイヌの人々の主要生活圏だったのだ。豊富な天然牡蠣を利用しない手はあるまい。

【厚岸湖の牡蠣島伝説】

「昔、厚岸湖には聳え立つ高山があつた。阿寒の山々と喧嘩ばかりしていたが、相手は兄弟が多く、こちらは一人。ついに敗れて逃げ出すことになった。この時、厚岸コタンの人々に片身として残していったのが、牡蠣島である。」

厚岸湖を去った山は、霧多布の琵琶瀬（ビバシエイ）で一息つき、振り返った。するとまだ阿寒の山々が睨んでいたので、遂には国後島まで逃げてようやく安住した。これが今のチャチャ山である。そんなわけで、チャチャ山麓の海岸にも牡蠣があり、霧多布の琵琶瀬にも牡蠣の貝殻が残った。

厚岸のアイヌが国後に行くと、必ず雨が降ると伝えられる。故郷の人と会うことのできたチャチャ山の、嬉し泣きの涙だという。それで厚岸コタンの人々は、年に一度は国後に渡り、チャチャ山にカムイノミするのがならわしだったという。」（厚岸町役場発行『厚岸の真実』より。表現一部改変）。

印象的山容を見せる国後島の秀峰・チャチャ岳が厚岸湖のところに聳えていたと空想すると、何とも興味深いイメージである。厚岸湖の生成と阿寒連山の活動とチャチャ岳の出現が、一連の火山帯活動で結ばれていたという、地質学的記憶でも反映されているのだろうか。それとも、厚岸地方と阿寒地方の勢力圏をめぐるドラマや、厚岸アイヌの人々と国後アイヌの人々の交流・交易・漁労などをめぐる、牡蠣を介しての生活史の痕跡だろうか。

いずれにせよ、火山と海との特殊な関わりの結果、残された置き土産が牡蠣だったというのは、エコロジカルな意味でも含蓄ある伝説だろう（厚岸湖は湖ではあるが、内陸湖ではなく厚岸湾と直接つながっている）。

【厚岸牡蠣を製品化した男】 古代や中世の牡蠣利用が学術的に確認されているかどうかはともかく、近代に入って厚岸の牡蠣に着目したのは、小島利兵衛^{こじまりへえ}だった。

天保二年（1831）に出羽国飽海郡の酒田に生まれた利兵衛は、明治四年（1871）に渡道。厚岸湖の牡蠣資源に付加価値を付けることを思い立ち、明治八年から研究を始め



厚岸牡蠣の商品化を最初に手がけたのが酒田（山形県）出身の小島利兵衛。往時の興味深いラベルが残っている（厚岸町海事記念館蔵）

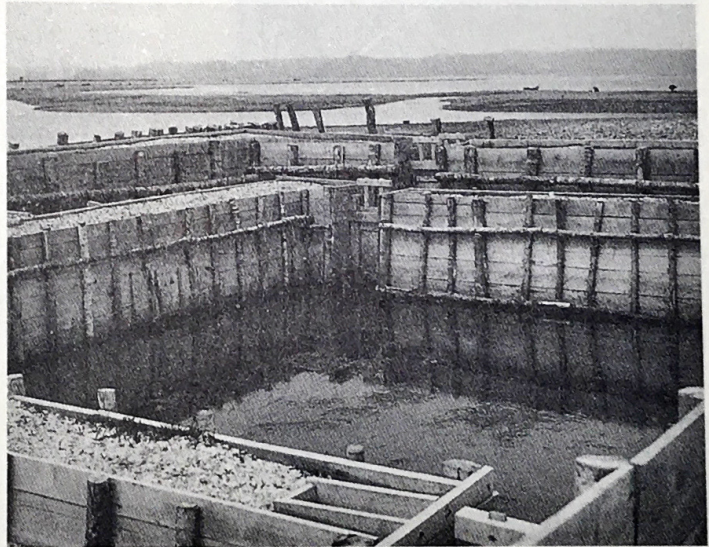
た。明治十二年（1879）に湖畔の奔渡村に移住したが、当時この地に住んでいたのは、アイヌ系住民の渡辺六助一家だけだったという。

明治十三年、小島利兵衛は公的な製造許可を得て、初めて牡蠣の乾製品を造った。明治十五年には中国人（清国人）の黄三梅に会って干牡蠣と牡蠣醤油の製法を尋ね、自らの製法改良に役立てたと伝えられる。黄三梅は同年、北見国常呂郡の猿澗湖（サロマ湖）の牡蠣を乾製品化するため、屯田兵士官の建部丑之助（越後高田出身の士族）に雇われてきていた。

小島利兵衛が開発した干牡蠣は、明治十六年（1883）、東京での水産博覧会で高く評価される。審査官から製品を見せられた横浜在住の清国人商人も絶賛。

同年、厚岸湖産の干牡蠣三百八十斤が、初めて清国に輸出された。干牡蠣の有望性が広く認識されたのはこれが切っ掛けだったといわれ、同業者が急増して、明治十七年の輸出は五万四千二百六斤に及んだ。牡蠣醤油の製造も、利兵衛が草分けとされる。牡蠣の佃煮や酢漬、缶詰、スープなども開発し、多くの博覧会や共進会で表彰された。

明治二十七年（1894）、小島利兵衛は住まいを東梅地区に移し、牡蠣をはじめとする産物



厚岸力キの養殖試験池（厚岸町海事記念館蔵）

の加工開発と製造を続けた。しかしこの地の牡蠣は、潮流などのせいで品質が劣っていたらしい。そこで利兵衛は湖の魚に目を着け、氷下待網の漁法を導入。キウリ、チカなどを獲って乾製品化し、北海道外の各地に売り出した。厚岸で氷下待網漁が行われたのも、これが最初だったという。なお乾チカについては明治十九年（1886）に表彰された記録があり、湖水産雑魚の製品化そのものは早くから手掛けていたことが窺える。

こうして近代北海道の水産加工の歴史に名をとどめた小島利兵衛は、明治三十年、六十七歳で没した。